

European
Living in
Japan

A German Architect in Niigata Breathes New Life into Old Japanese Houses

日本の古民家再生に取り
組むドイツ人

日本有数の豪雪地帯として知られる新潟県十日町市。大河ドラマ「天地人」のオープニングにも登場する美しい棚田が広がる同市の松代（まつだい）地区の山村に住み、古民家再生事業に取り組んでいるドイツ人がいる。ベルリン出身の建築デザイナー、カール・ベンクスさんである。

「日本人は宝石を売って砂利を拾っている」——。ベンクスさんがよく使う表現だ。伝統的な民家を壊し、どれも同じように見える新しい住宅を建てるとは、ベンクスさんから見ると、あまりにももったいない話だ。日本の古民家は、世界中どこを探しても見あたらない、秀れた材料と技術の結晶だ。家具職人の父の蔵書を通して、ベンクスさんが子どものころから親しんできた建築家ブルーノ・タウトも「日本の設計士は幸せだ。このようによい仕事をする職人がいるのだから」と言っているが、ベンクスさんもまさにその通りだと思っている。日本の木造建築は材料が良質で、技術も確かなので、そう簡単に壊れない。実際、築180年の古民家を再生したベンクスさんの自宅も、2004年と2007年の2回の地震でほとんど被害がなかった。



解体・再生前



再生後

古民家は“宝石”

第二次大戦中に旧東ベルリン地区で生まれたベンクスさんは、「ベルリンの壁」の建設で東西ベルリンの行き来ができなくなる直前、19歳の時に親兄弟を残したまま脱出した。再統一された故郷ベルリンでは、ヨーロッパの他の都市同様、新築よりも古い建物の人気が断然高い。広々とした間取りの戦前のアパートをリフォームした建物が市場価値も高く、憧れの物件となっている。皮肉なことに、旧東ドイツは資金不足で大々的な建て替えができなかったことから、東ベルリン側に古い建物が集中している。

ヨーロッパでは建物自体に価値があ

るとされ、家屋は増改築しながら長く使い続けるのが常識。ドイツを例にとれば、築100年以上の建物の解体は法律で禁止されており、100年未満でも、政府が国民のために価値があると判断した場合は、建物を保存しなければならない。その代わり、所有者には補償金が与えられる。

一方、日本では古い家は敬遠されがちで、「古家付き土地」として売り出されることも珍しくない。土地代が世界一高い東京では仕方ないことかもしれないが、かつては日本の民家も増改築を繰り返しながら末長く使っていくことを前提としていた。古民家を「宝石」に例えるベンクスさんは、こうし

た宝を大事にせず消えゆくままにするのは、あまりに惜しい、と指摘する。

「記念館」でなく、快適な住まいを

作りが良いと言っても、築100年以上の家にそのまま住むことは難しい。新潟の豪農の館や京都の町家など、保存されている古民家を訪れる人は、現代生活の中には見ることでできなくなった日本の「美」に心を動かされたり、昔の匠（たくみ）の見事な技に感心したりする。だが、実際に住みたいかと問われれば、多くの日本人は、昔の生活の厳しさや不便さを思い浮か

べ、かなり戸惑うのではないだろうか。

しかし、ベックスさんが再生する建物は多くの人の想像とは異なる。現代の日本人から見ても、快適な暮らしが約束されている。例えば、ベックスさんの自宅は、梁(はり)や柱などの骨組みをそのまま利用しながら、古い天井や土壁を取り払い、窓も大きくする

あくまでも住人の生活に合ったものでなければならぬ。だから、自分がデザインする家の建築作業は必ず自分の

であり、特徴となっている。

旅館再生という新たな試み

ベックスさんの元には全国から依頼が舞い込むようになっていく。彼がここ数年力を注いできた、自分が住む集落を「古民家再生の里」にするという意欲的な試みである「竹所(たけところ)プロジェクト」も、地元の竹所の住民や再生民家に住むためにわざわざ東京などから移住してきた新しい仲間

に支持され、順調に動き出している。さらに、ベックスさんが現在取り組んでいるプロジェクトの中で注目されるのは、明治時代に建てられた松代の旅館「松栄館」の再生だ。これまでベックスさんが手がけてきた仕事は、主として個人宅だったため、一般の人々が見学するのは難しかった。松栄館が完成すれば、ベックスさんの仕事ぶりを多くの人が見学できるし、若い人たちが、失われつつある文化や技術を未来の世代に継承しようと思うことになるだろう。

行政対応や人々の意識など、変わらなければならないものは多いが、ベックスさんの姿勢はあくまでも前向きだ。「これまでも、少しずつでも前進があった。自分ができることや、やるべきだと思うことを、ひとつひとつやっていくだけだ」と、彼は語る。「心配なのは、やるべきことや、やりたいことがあまりにも多すぎて、残された時間で完成できるか分からないことだけだ」と、爽やかに笑う66歳のベックスさんの目は輝いていた。



リビング



キッチン

ベックスさんの自宅、双鶴庵。古民家の基礎部分を再生し、外観は和風、内装は洋風の快適な居住空間に生まれ変わった

写真提供 カール ベックス & アソシエイト社

ことで、光が燦々(さんさん)と降り注ぐ開放的な作りとなっている。同時に、壁には断熱材を入れ、窓にはドイツ製のペアガラスとサッシ、おまけに床暖房と、現代的な設備を完備。家具やキッチンの調度品など内装もヨーロッパ調で、美しく快適な空間を生み出している。

日本人が民家の再生を行う場合、いや、日本に惚れ込んだ外国人が行う場合であっても、「本物」にこだわるあまり、伝統な造り方に縛られがちである。だが、昔は和風の家に洋間が一間という形が多かったが、最近では和室が一室あるかないかとなるなど、日本人の住居スタイルは大きく変わっている。

「自分が提案するのは、あくまでも住むための家であって、(文化財保存のための)博物館や記念館ではない」と言うベックスさん。歴史や文化を保存し、展示するのが「記念館」の役割だとしたら、人が暮らす「住まい」は、

目で見に行き、依頼主や職人と話し合いを繰り返す。細かい図面を最初に作ってしまうのではなく、作業の中で臨機応変に対応しながら作っていく、完全な「手作り」方式だ。だから、1年に手がけることができるのは4軒程度だという。

家という大事な「遺産」を再生させ、守っていくためのこうした信念こそがベックスさんの取り組みの大きな魅力



Karl Bengs

カール・ベックス

建築デザイナー カール ベックス&アソシエイト有限会社社長

1942年、ドイツ・ベルリン生まれ。同地で建築を学んだ後、パリで建築デザイン事務所に勤務しながら、建造物や家具の復元・修復を学ぶ。1966年、空手を学ぶため日本大学に留学。建築関連の仕事に携わりながら、約7年間滞日。帰国後、デュッセルドルフに日本家屋を移築するなど、日本建築・庭園を手がける。1993年、ドイツに移築する民家を探しに訪れた新潟県十日町市(現)で現在の自宅となる古民家に出会う。その移築再生をきっかけに、古民家再生プロジェクトを立ち上げ、これまでに40軒近くの民家をよみがえらせた。2007年、第2回安吾賞新潟市特別賞受賞。www.k-bengs.com/